

A-PLAN 「シニア-チューター-プログラム」 Senior Tutor Program (仮称)

「シニア市民(55歳+) 出番とやりがいのニーズ」と「親や家庭教師から勉強の手伝いを受けられない低所得層、移民、養護施設など日本の豊かさを受受できないの子供たちのニーズ」を繋ぐプログラム。

(1) 背景

リタイアした後の人生を以前「余生」と呼んでいたが、日本人の体力が向上し寿命が大幅に伸びた今その呼び名は当てはまらない。経験で培われた知恵やスキルや忍耐力に加えて体力もあり生活を維持する経済力をもつ世代は日本社会の眠れる資源だ。「余生」ではなく「人生第二章」という呼び方がふさわしい。

米国テンプレトン財団(Templeton Foundation)の調査では、社会貢献をしているシニアほどしていない人に比べてはるかに健康で長生きをするという結果が発表されている。

参照：http://www.metanexus.net/magazine/Article_Detail/tabid/68/id/10073/Default.aspx

International Journal of Behavioral Medicine 誌 vol.12 (2005) に掲載された記事

“Altruism,Happiness and Health; It's Good to be Good”

(2) プログラム内容

「シニア-チューター」が、日本社会の豊かさの恩恵に授けられない子供たち(擁護施設、移民、低所得層など)の勉強の手伝いをする。移民の場合は日本語学習の手伝いを含む。チューターはサービスに対して「教育クーポン」を授与される。

オバマ政権のSilver Scholar Program(シニアがマイノリティーの子供の勉強350時間の勉強の個人指導を与えたことに対し1000ドル相当の教育クーポンを支給。クーポンはシニアの子供、孫、里子の教育費用に当てることができる)にヒントを得て、同様の教育クーポンのシステムを取り入れる。従事する時間やクーポンの額は日本の状況に応じて決める。

(3) 関わるスタッフ

このプログラムに必要なスタッフは;

- シニア-チューターの選考を行い、プログラム開始後は進行状況のモニターとチューターからの相談に応じる元教師、元校長、心理カウンセラーなど。
- シニア-チューターと学校との連絡を受け持つコーディネーター。マネジメント経験のあるシニア市民が望ましい。

(4) 財政的な支援

- と b) の人材にはことによって資本主義のインセンティブののって「所得税の免税」という恩恵を与えるを与える。また、このプログラムのために使う教材の購入が発生した場合は免税とするか、50%の支援金を送る。

(5) イメージ

「シニア-チューター-プログラム」（仮称）に参加することは誇りに繋がるイメージを創ることが重要だ。そのためにスクリーニングを徹底し、優秀な人材を集める。決まった時間数を終えたらバッジを給与するなどの目に見えるラベルを与える。受け持つ生徒の成績の向上をモニターし、優秀なチューターを表彰するなどしてプログラムが活性化するようにする。

バッジのデザインは日本を代表する先端的なデザイナーにヴォランテニアで協力を求めメディアを通して一般市民からプログラムへの興味をひくPRを行う。

B-PLAN 「伝記語りプログラム」(仮称)

「高齢者の孤独の軽減と彼らの誇り」と「若者のコミュニケーション能力/エンパシーの育成、さらに現在の日本/自分の立ち位置の認識」を促すプログラム。

(1) 背景

高齢者は、一番欲しているものは「話し相手」と誰もが答える。

彼らは自分の人生を振り返り語ることが大きな喜びとなりセラピーとしての効用があることは科学的に証明されている。

いっぽう大家族の少ない現在、若者は高齢者に接して深く話をするチャンスが余りなくその結果、歴史の流れのなかで日本/自分の立ち位置を知る具体的な手がかりがない。例えば「日本は敗戦した」ということを歴史の本から知るよりも、その時代に生きた人から「あの頃は食料は配給で白米は贅沢だった」などの生の声を聞く方が貧しい時期が日本にあったという事実が胸に深く刻まれる。この認識は日本の歴史という大きな流れの中で豊かな時代に生まれた自分を客観的に見ることに繋がり、願わくば、豊かな時代に生きる自分のグローバル市民としての役目を問う気づきに繋がるだろう。

80年代から10年足らず続いたバブル経済繁栄の期間に、それまで日本文化の底流に存在した清貧の価値が陰を潜めた。時代遅れの価値観として隅においやられ、物質的な豊かさを尊ぶ文化が生まれた。戦争、敗戦、高度成長期、そしてそれまでの努力と犠牲の結果生まれた経済繁栄に至る流れを経験した世代に焦点を当てたい。彼らが体験を語ることが豊かさの恩恵にあずかっている若者に彼らの体験を語ることが気づきを呼び起こすのではないだろうか。

(2) プログラム内容

若者がインタビュアー、高齢者が語る側というプロジェクトを創る。

「雑談」では、深く話を掘り下げることができないお互いの理解は浅いレベルに留まる。「インタビュー」という形をとることによって、日常の状況で生まれがちな「高齢者が若者に諭す」とか「若者が高齢者に遠慮しながら助言を求める」という関係ではなく、インタビュー側の若者と語る側の高齢者の間に個人と個人との緊張を孕んだ別の次元の人間関係が生まれる。インタビューが進むにつれ質問を考えるために若者は日本の歴史を調査する必要性が生まれより深い近代史の理解も生まれる。おそらくは両者の間に絆が生まれる。

具体的には、(仮に)2時間X5回のインタビューのあと、若者が「語り」をベースとして伝記を書きウェブサイトのにせ公開する。そしてサイト上の「伝記語りコミュニティー」を創り、お互いの伝記を読んだ高齢者が交流する。高齢者はふつうコンピューターの知識がないので若者が助ける。

ハードコピーも作成する。

(3) 関わるスタッフ

若者にインタビューの訓練を与え、高齢者と繋げ、モニターするコーディネーターを選出する。現職を含むジャーナリストや教師、作家などが望ましい。サービスに対して彼らの所得税を免除することによってインセンティブをつくり優秀な人材を集める。

(4) イメージ創り

このプログラムは優等生のためのものではなく対象はあらゆる若者であることを明確にするリクルート戦略が必要だ。高校中退、定時制高校生などを対象に入れる。高齢者側もあらゆるセクターから募る。